

第 18 回 DAY 賞
Distinguished Alumni of the Year
March 26th, 2023

受賞者略歴

(敬称略、卒業年順)

青木 理恵子 AOKI, Rieko

22 期 ID78 Language, 1981 年 3 月卒業, 1981 年 3 月修士課程修了

特定非営利活動法人 CHARM (Center for Health and Rights of Migrants) 事務局長

1978 年 ICU 在学中に ICU 教会で古屋安雄牧師より受洗。

1979 年に ICU 教養学部語学科卒業 (ID78 23 期) 1981 年大学院教育学言語学専攻修了 1981 年より東京 YWCA、1986 年より日本 YWCA で幹事職の後 1989 年よりフィリピンに 3 年間留学の後 1992 年より京都 YWCA で外国人電話相談プログラムコーディネーターとして 10 年間外国人支援を開始。退職後外国人の就労の場として市民的喫茶・Bazaar Café 立ち上げに関わり、2002 年から現職。日本キリスト者医科連盟 2022 年度会長。

Baptized at ICU church in 1978 (Rev. Yasuo Furuya).

After graduating from ICU in 1979 and Graduate School in Education in 1981, Rieko Aoki worked in Tokyo YWCA from 1981 and Japan YWCA from 1986 in the field of youth and women empowerment. She then went to the Philippines to study about social welfare for migrants for three years and started to work as a Coordinator for hotline service for foreigners in Kyoto YWCA in 1992. She then joined to establish Bazaar Café, a workplace for foreigners and started Center for Health and Rights of Migrants (CHARM) from 2002. President of Japan Christian Medical Association for the year 2022.

横関 祐見子 YOKOZEKI, Yumiko

24 期 ID80 Education, 1982 年 3 月卒業

JICA 広域企画調査員 (サヘル地域の平和構築) / JICA Senior Adviser for peacebuilding in the Sahel Region

ケニアとジンバブエの農村中学校の教師を経て、ユニセフ・ジンバブエ事務所で教育・幼児教育担当官補として勤務。その後 JICA 国際協力専門員としてアフリカ地域を中心とした教育開発に従事。JICA に 17 年勤務した後ユニセフに復職し教育チーフとして東南

部・中西部アフリカ地域事務所勤務。2015年4月よりユネスコ IICBA 所長としてアフリカ地域の教師開発と平和構築に貢献。アフリカに30年住み、ほぼ全てのアフリカ諸国を訪問。国連退職後2022年11月からJICA 企画調査員（サヘル地域平和構築）としてセネガルで勤務。

After teaching at rural secondary schools in Kenya and Zimbabwe, Yumiko Yokozeki worked as an assistant project officer for education and early childhood development in UNICEF, Zimbabwe. Then, she was engaged in educational development mainly in the African region as a senior adviser for JICA. After working for JICA for 17 years, she returned to UNICEF as Education Chief at two African regional offices. In April 2015, she moved to UNESCO to head UNESCO IICBA and contributed to teacher development and peacebuilding in Africa. She has lived in Africa for 30 years and has visited almost all African countries. After retiring from the United Nations, she has been working in Senegal for Sahel region's peacebuilding since November 2022.

林 理恵 HAYASHI, Rie

29期 ID85 Language, 1986年3月卒業

日本放送協会 専務理事 メディア総局長

1986年に日本放送協会（NHK）入局。政治、国際報道部門の記者としてキャリアをスタートさせた。1999年より2008年までNHKの国際協力業務に携わり、放送関連の各種国際機関とNHKの協力関係を構築した。2008年より2012年まで、経営企画局で経営計画の策定に従事。2015年より国際放送局国際企画部長、2017年より神戸放送局長、2019年よりNHKの海外発信を統括する国際放送局長、2020年より理事（人事、総務、ダイバーシティ推進担当）。2022年4月25日付で専務理事に就任し、メディア総局長として、放送、デジタル、イベント等、NHKのメディアサービス部門を統括している。

HAYASHI Rie joined NHK in 1986. She started her career as news reporter for politics and international affairs. After working with various international organizations in broadcasting industry as liaison officer, as well as being involved in NHK's corporate planning, she was appointed in 2015, as Head of Global Strategy, NHK WORLD. In 2017, she was assigned as Director of Kobe Station, and then assumed post of Director, NHK WORLD. In 2020 she joined the Executive Board as Senior Director, responsible for human resources and diversity. As of April 25, 2022, she was promoted to Executive Director, responsible for all media operations of NHK.

折居 徳正 ORII, Norimasa

35期 ID91 Humanities, 1991年3月卒業

一般財団法人パスウェイズ・ジャパン (Pathways Japan) 代表理事

企業勤務を経て2002年よりNGO職員としてアフガニスタン、イラン、パレスチナ、シリア、ミャンマー等での人道・難民支援に従事。2016年より(特活)難民支援協会にて難民受け入れ事業マネージャーを務め、シリアの若者を各地の大学・日本語学校に留学生として受け入れ。2021年7月、難民支援協会より同事業の移管を受けたパスウェイズ・ジャパンの設立に携わり、代表理事に就任。以後シリアに加えてアフガニスタン、ウクライナからの難民の受け入れと高等教育支援に従事。Global Taskforce on Third Country Education Pathways 委員。国際政治学修士。

After working for a company, Norimasa Orii has been working in humanitarian and refugee assistance in countries including Afghanistan, Iran, Palestine, Syria and Myanmar. Since 2016, he has been a Project Manager for Refugee Admission at Japan Association for Refugees, where he has supported the admission of Syrian youths as international students at universities and language schools in Japan. In 2021, he was involved in the establishment of Pathways Japan and became Representative Director after the transfer of the project from Japan Association for Refugees. Since then, he has been involved in admission of refugees from Afghanistan and Ukraine in addition to Syria and supporting higher education for refugees. He is a member of the Global Taskforce on Third Country Education Pathways and holds a Master's degree in Global and Asian Politics.

同窓生へのメッセージ

青木 理恵子 AOKI, Rieko

22期 ID78 Language, 1981年3月卒業, 1981年3月修士課程修了

特定非営利活動法人CHARM (Center for Health and Rights of Migrants) 事務局長

私は、現在 NPO 法人 CHARM という市民団体に働いています。この団体は、「すべての人が健康に過ごせる社会」を目指しています。日本に暮らす外国人が保健や医療そして福祉を受けるための支援と社会の環境を創ることを活動の目的としています。

市民団体の活動は、1人の人から始まります。CHARM も 2000 年に1人のタイ人が医療機関に運び込まれたことから始まりました。エイズを発症していました。健康保険はなく、在留資格も切れていました。受け止めた医療者たちは、重篤になってからしか病院につながれない外国人の実情を目の当たりにし、もっと早い時期に医療につながるための包括的なシステムを感染症の分野からつくろうと CHARM を立ち上げました。

外国人が医療につながるまでには様々な段階で壁があります。行政の手続きや医療機関での言語の支援は徐々に整備され始めていますがまだ地域の差があります。日本では、永続的に日本に暮らしていることを前提として多くの制度ができているため、前例のない案件は受け付けられないと外国人が言われることは多く、人が国境を越えて移動し、住民として共に生活するという現実に制度が追いついていません。

私は、1974年9月に秋期学生としてICUに入学しました。入学式で世界人権宣言を読み、ICUはこの宣言に書かれていることを実現する人材を育てることを使命としていると説明されました。

第一条「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ尊厳と権利とにおいて平等である。人間は理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない。」

世界人権宣言を実現する人材育成の訓練は大学生活が始まるとすぐに始まりました。入学式の直後に少人数で教授宅に客として招かれ、ホスピタリティーを体験。レポートを提出した後に私が書いたテーマについてディスカッションを教授が申し入れ、対等な人間として扱われていると感じました。

毎年夏に参加した野尻キャンプでは、太古の昔からこの湖を見守ってきた深い森に人間を超えた力を感じ、自分も自然界の被造物の一つであると捉えるようになりました。民族舞踊同好会を通して先人が自然から学んだ身体の動きを練習する中で自然の一部として生かされている自分を体感しました。

ICUでの数々の経験の結果、互いに同胞の精神を持って行動することは自然の成り行きでした。制度に入れない人々の側から交渉する、新たな仕組みを生み出す、何もできないことを共に嘆く、社会に広く啓発するなど様々な行動ができたことは幸いです。大海の一滴の水が繋がって大きなうねりになる奇跡も感じました。

現在の日本社会は、人々の声がかき消され、分断されているように感じる事が多く、無力になりなりがちですが、本来人々には力があると確信しています。そしてその力を行動に移すことを私たちICU出身者は大学生活の中で訓練されています。

自由、権利、尊厳という日本でなかなか定着することが難しい概念を体感し体得する訓練の場であったICUに学んだことは感慨深くまた誇りです。

I work with a civic organization Center for Health and Rights of Migrants (CHARM). The organization aims for “Heath for all” and provides individual support as well as creating environment where foreign nationals residing in Japan have smooth access to health and medical services.

CHARM started with an individual who was brought to hospital as an emergency patient. She was Thai and had developed AIDS. She did not have legal document to stay in Japan and was not a member of Health Insurance. Medical professionals who witnessed the reality of foreigners who cannot go to hospital for various reasons established CHARM to provide more holistic care from information, consultation, language support and belongingness.

I remember reading World Declaration of Human Rights at our commencement ceremony and was explained ICU is a training ground to acquire sense and attitude to live concepts of Freedom, Dignity and Rights. And I did through numerous encounters with professors, friends and natural environment during ICU days. Such an unique training ground with a broad vision is very unique and I am thankful as well as proud to be a part of ICU.

横関 祐見子 YOKOZEKI, Yumiko

24期 ID80 Education, 1982年3月卒業

JICA 広域企画調査員(サヘル地域の平和構築) / JICA Senior Adviser for peacebuilding in the Sahel Region

この度、DAY賞を頂き感謝しています。本当のところ、私でよいのかなと半信半疑なのです。もっと素晴らしい仕事と生き方をしている同窓生は沢山いますから。ICUは一風変わった大学です。在校生の皆さんに、ICU在学の機会を存分に活用して頂きたいと思うのです。

1976年4月、満開の桜の中、ICUに来た時のこと夢の中のように覚えています。第三女子寮に入って素敵な先輩たちと今も仲良しの同期との出会いがありました。昔のD館の室内楽クラブ(CMS)の部室ベランダでキコキコと恐ろしく下手なビオラを弾き、夜遅くまで心理学実験室や図書館にいました。思えば、自分がどのくらい無知であるのかにも気づかない鼻持ちならない大学生でした。幼稚園から大学までの一貫教育私立校の中・高等部でいじめにあって逃げてきた「手負いの野生動物」のように身勝手な若者でもありました。

周りを見渡すと、負けず劣らずの変わった人ばかりでした。多様な若者たちが全国、全世界から集まってくるのを、平然と受け止めているのが、武蔵野の原野にあるICUでした。うっそうとした緑の中にあるキャンパスに続く野川公園も大学の持ち物だったので、どんなに歩いても大学から出られませんでした。教養学部で1年目の英語の集中学習は、何を勉強したいかを考える時間をくれたことに、後になって気づきました。これは大変に貴重なことです。

米国留学したいと相談すると、当時カウンセリングを担当されていた都留先生は「アーラム大学というところ面白そうですね」。クエーカー教の大学でした。この大学に2年間いてクエーカー教、人権、非暴力などについて学び、アフリカの歴史や開発に興味を持ち始めました。復学して1982年にICUを卒業してから、ずっとアフリカで仕事をする事になりました。ケニアとジンバブエの農村の中学校や高校で教えて、国連やJICAで働く中で、多くの友人や同僚、夫、飼い犬や飼い猫全てアフリカで出会いました。30年以上日本を離れてアフリカ54か国ほぼ全ての国々に行きましたから、「日系アフリカ人」を自称しています。

ICUは多様性とともな「レジリエンス」を養ってくれる場であったと感謝しています。失敗して転んでも、起き上がって歩きだせるような場を提供してくれました。いじめの体験が生々しい時の私は心理学を専攻したいと思っていましたが、次第に教育学や言語学にも興味を持つようになりました。脱皮と成長を繰り返す学生たちを許容する大学もまた、脱皮と成長を繰り返してきたと信じています。

私は昨年10月に国連を退職しました。そして古巣JICAに戻り、アフリカ・サヘル地域の平和構築のために働く機会を与えられました。これまでの専門分野であった教育も卒業して、今は平和構築の勉強をしています。これが最後の「脱皮」となるかもしれませんし、まだ何かあるかもしれません。日本人女性は世界一の長生きだそうですから。

ICUは1949年に和解と平和のための「明日の大学」として生まれました。米国の日本人と留学生と一緒に学び生活して平和な世界を築くためです。第二次世界大戦は、世界中

を戦禍に巻き込みました。戦争の後に人類が真摯に平和を願う気持ちが生まれ、米国と日本での資金調達キャンペーンによって、このユニークな大学が出来たのです。

現在の世界は第二次世界大戦に向かった状況を上回る脅威にさらされていると言えるでしょう。20世紀半ばに人類の「和解と平和」のためにできた大学が、21世紀の世界の「共生と共存」のために何ができるのか、在校生、教職員、同窓生、皆で考えていけたらと思うのです。ICUの教育と研究はいつも光っていました。愛する母校に他の大学や研究機関をけん引し続けてほしいと思います。「共生」と平和構築のために、21世紀の平和と共存のために。

I am grateful for receiving the DAY Award. ICU is a unique university and I hope all students will take advantage of the opportunity while they are here. I remember coming to ICU in April 1976 with the cherry blossoms in full bloom. At the third women' dormitory (3WD), I met wonderful seniors and fellow students whom I still keep in touch with. When I looked around, there were many "eccentric" people, including myself. ICU, located in the wilderness of Musashino, calmly welcomed and embraced diverse young people from all over Japan and beyond. The period of intensive English course in the Freshman year was a valuable time to think about what we wanted to study afterwards.

ICU was also a place that nurtured the "resilience" that allowed us to pick ourselves up and start walking after we made a mistake and fell. I believe that the university itself has also repeatedly molted and grown.

I became interested in development and Africa while studying at a Quaker College in the US taking a leave from ICU. I have been working for development ever since. I have lived in Africa for over 30 years and have been to almost all of the 54 countries. I now consider myself slightly more African than Japanese, calling myself a "Japanese African". After retiring from the United Nations in October last year, I was given the opportunity to work for peacebuilding in the Sahel region of Africa with JICA. I have also "graduated" from education, which was my area of specialization, and am now studying peacebuilding. It seems that I keep molting.

Learning from the devastations of the World War II, ICU was born as a "university of tomorrow" for reconciliation and peace; for Japanese and international students to learn and live together to build a peaceful world. The world today is even more threatened than it was in the 1930s and 1940s. I would like us all to think about what a university that was established in the 20th century for "reconciliation and peace" for humankind, can do for "living together and coexistence" in the 21st century.

林 理恵 HAYASHI, Rie

29期 ID85 Language, 1986年3月卒業

日本放送協会 専務理事 メディア総局長

この度は、大変栄誉ある「DAY賞」をいただくことになり、身に余る光栄と厚く御礼申し上げます。歴代の受賞者のみなさまが、それぞれの分野で専門性を発揮されご功績をあげられた素晴らしい方々ばかりなので、正直申し上げて、私のように組織で一サラリーマンとして勤めて来た者がいただいているものかという驚きと戸惑いがありました。でも、大好きな母校が評価してくださったことが嬉しく、また、これからも一層励むべしと背中を押していただいたと思い、ありがたく頂戴することといたしました。目立たぬ私を推薦してくださったみなさま、これまで支えてくださった全てのみなさまに感謝申し上げます。

私はメディア業界で仕事をしています。ICUは規模の小さい大学ですが、その割には、私の勤務先を含めこの業界には結構な人数の同窓生仲間がいます。「え？あなたもICU？」的の出会いが多い。そしてみんながそれぞれに活躍していますので、ICU出身というのはささやかな自慢です（いや、堂々と自慢していいのですが、そこは慎み深いICU生ということと…）。私自身は、記者としてキャリアをスタートしたのちに、国際協力という仕事に携わり、世界のメディア等との交流を深めることで人的ネットワークを広げました。ICUで学んだ異文化間コミュニケーション術が大いに生きてと思います。

メディアは国際的に大変革の渦の中にあります。多種多様なプラットフォームが生まれ、誰もが自由に世の中に情報を発信できる時代になりました。この環境の激変に向かいつつ、メディア機関として、どう質の高い情報やコンテンツを送り出し続けるか。その一番のベースとなるのは、優れた人材です。変化に敏感で、新しい知識に貪欲で、豊かな発想、柔軟性、そして何より創造する力。これらは、得ようと努力するだけではどうしようもない、ある種のセンスを伴うものだと思います。今思い返すと、ICUはそうした人材を培ってくれるネストのような場でした。バカ山で寝っ転がり、女性ファッション誌の「〇〇大学にお邪魔しました」というバブル期ならではの企画ページの、ブランドものに身を包む他学生さんたちの写真を見ながら、「かっこいいなあ。同じ都内なのに別世界だなあ」と遠い目になったり、他校の人から「ICU生って変わってるよね」と言われたりもしましたが、その実、人と同じである必要はないという大切な価値観を、教わったように思います。そこから生まれる視点やクリエイティビティが、すべての源泉になっているのだと、今こうしてメディアに身を置く者として感じています。このICUらしさは今も変わっていないのではないのでしょうか。

こうした価値観を共有できる仲間めぐりあえたことも、私の人生の宝物です。ICU卒業生ならみな同じ経験をお持ちだと思いますが、かつてのクラスメートたちが国内・海外問わず広く羽ばたき、みんながそれぞれ選択した場で生き生きとしている。とても嬉しいことです。ICU時代からの親しい友人たちは、住んでいる国こそバラバラですが、昨今の文明の利器もあり、相変わらず40年近く前と同じトーンでゆるい話をしたり、相談に乗ってもらったり、コロナ禍ではオンライン飲み会で笑い合ったり。距離はあるけれども近くにいる、大切な存在に心から感謝しています。

そんなICUで学び、素晴らしいみなさんの輪に同窓生の一員として加わることができ、本当に幸せです。ICUの知名度、魅力度を高めることに貢献できているか甚だ疑問ですが、

その名を汚さぬよう、また DAY 賞受賞者の名に恥じぬよう、一層精進してまいります。引き続きご指導賜りますよう、どうぞよろしく願いいたします。この度は誠にありがとうございました。

I would like to express my deepest gratitude to receive the prestigious Distinguished Alumni of the Year Award. It is such an honor that my alma mater, which I love, recognized my achievements.

ICU is a small university, but there is quite number of alumni in the media industry. Today the media is facing a major change around the globe. A wide variety of platforms have been created, and anyone can disseminate information to the world. Faced with this drastic change in the environment, in my case from the perspective of a member of a media organization, human resources are must-have to continue delivering quality information and content – that are sensitive to change and eager to acquire new knowledge, with rich ideas, flexibility, and above all, the ability to create. ICU was a place like a nest that nurtured such abilities.

Friends from ICU who share such same values have become a treasure of my life. Classmates have been spreading their wings widely, both domestically and internationally. Everyone is being active at the place of choice. I think it is wonderful. My friends from the ICU days live in different parts of the world, but we still chat in the same manner as nearly 40 years ago. Although there is a distance physically, their existence has always been so close.

It is really a pleasure to have been in the group of ICU alumni. I will do my utmost effort to contribute to increasing the name recognition and appeal of ICU.

Thank you very much.

折居 徳正 ORII, Norimasa

35期 ID91 Humanities, 1991年3月卒業

一般財団法人パスウェイズ・ジャパン (Pathways Japan) 代表理事

この度は、名誉ある賞を受賞させて頂き光栄に存じます。ICU コミュニティに受け入れて頂いたシリアやウクライナの難民・避難民の学生・卒業生たち、そして Japan ICU Foundation を始めプロジェクトに関わるすべての人々に頂いた賞と理解して、代表して受賞させて頂きました。

卒業から四半世紀が経つ2015年頃から、シリア留学生の受け入れを通じて思いがけずICUと再び関りが生まれ、現在までにトルコから7名の学生の受け入れを進めてきました。2015年当時、シリア内戦に起因して100万人もの難民・移民が欧州に移動する人道危機となる中、その年に日本で難民と認定されたシリア人はわずか6人でした。「いくら何でも難民の受け入れにおいて日本社会はもう少し貢献できるのではないか？」自分はそれまで、国外で人道支援を行う市民社会組織で活動していましたが、他国に行って難民を支援するよりも、自分の国の状況を変えたいと考えるようになりました。そして、難民支援協会が日本語学校と協力してシリア難民を留学生として受け入れるプロジェクトのマネージャーとなり、2016年にシリア留学生のトルコからの受け入れを開始したのです。すると、時を同じくしてJapan ICU FoundationとICUでも、奨学金を創設し大学としてシリア難民を受け入れるためパートナーを探していることがわかり、以後協力してSyrian Scholars Initiativeの立案と実施に携わり、ICUへのシリア留学生受け入れを進めてきました。

その後2022年2月24日にロシアによるウクライナへの侵攻が起こった際、以上の経験に基いていち早く3月からウクライナ避難民の学生受け入れをICUと始め、日本の大学としては最も早い時期の同年5月に、5名の学生を受け入れることができました。以後その先例に倣って多くの大学より協力の申し出を得るに至り、受け入れのネットワークは18大学、25の日本語学校にまで広がっています。

受賞に際して振り返ると、ICU在学当時、自分は社会や周囲との関りについて本当に悩んでいる学生であったと思います。このような賞を頂くことになるとは、当時の自分を知らずとも、自分自身も、まったく思っていなかったものと思います。ただ、自分は前年にDAY賞を受賞された並木浩一先生に1-3年生の間指導教員としてご指導を頂き、4年生には2018年に帰天された古屋安雄先生にご指導を頂き、特に古屋先生の授業から、多くのことを学ぶことができたと思います。イスラームを含む諸宗教に対する関心や理解、アジアや旧ソ連諸国に対する関心と知識、平和や人権に対する感覚と理解等は、振り返って考えるとすべてICUで学んだことでした。その後の自分の人生での関心と軌跡を振り返ると、アフガニスタン、パレスチナ、シリア等中東諸国との関り、ミャンマー等東南アジア諸国との関り、難民を通じた紛争と平和との関り、そして旧ソ連圏であるウクライナとの関り等、ICU時代の関心と理解の外には、結局ほとんど出ることにはなかったのではないかとさえ思われます。

2020年代の今日、留学、就業、人道ビザ等で大学・市民社会組織・企業等が難民を受け入れることは、少しずつ当然のこととなって来ています。しかし現在まで日本で、そしてアジア全体でも、ICUとパスウェイズ・ジャパン(2021年7月より難民支援協会から

プロジェクト移管を受けて設立)が、難民の国籍を問わず受け入れを実践するほぼ唯一の先進的事例となっています。2016年の時点で、日本の市民社会でそれを考え、実行に移したのはICUとICUで学んだ自分のみであったのは、偶然ではなく何らかの必然だったのではないか、そのようにも感じさせられます。

翻って将来を考えると、世界人権宣言にある通り、すべての人は祖国を離れざるを得ず難民となった際には、支援を受ける権利を有しています。現在日本社会に、あるいは他の国々に住む我々や我々の子ども達も、30年後、50年後に祖国を離れざるを得ない状況が生まれた場合には、支援を受ける権利を有しています。歴史の流れの中で、今その時がシリアやウクライナに訪れたので、これら若者達は祖国を離れて日本に来ることとなりましたが、それによって様々な出会いと新たな価値も生み出されてきました。自分は幸いにも、そのような若者がその権利を行使して、人生を立て直すための仕事に従事させてもらい、彼らから多くのもを受け取り、学ばせてもらいました。今後は彼らが、日本社会を支える重要な存在となって行ってくれるものと信じています。

I received this honorable award on behalf of refugee and evacuee students and all the people who work for education pathways programs at ICU and JICUF. In 2015, when a million of displaced people moved to Europe, Japan's government and society seemed reluctant to admit refugees, I thought Japan's society could do something for those people and launched a program to admit Syrians as language school students at Japan Association for Refugees (JAR). JICUF and ICU were simultaneously having the same idea and we built partnership to jointly recruit them to ICU. Seven Syrian students, so far, have been studying at ICU.

On Feb 24th, 2022, when Russia sent troops to Ukraine, ICU, JICUF and Pathways Japan (which succeeded the admission program of JAR) took an immediate action to admit Ukrainian students to ICU, based on our past experience. As a result, ICU welcomed five Ukrainian students in early May, as one of the earliest admission of Ukrainians by universities. The impact was huge as we could expand our partnership with up to 18 universities and 25 language schools which in total admitted around 100 Ukrainian students by the end of 2022.

Looking back my days at ICU, I feel what I engaged myself in my career are all under influence of what I learned there. My supervisor in Senior was late Prof. Yasuo Furuya and I learned a lot from him about philosophical and religious thoughts including Islam. On the awake of European refugee crisis in 2015, JAR where I worked and ICU/JICUF were the only responders to the situation in Japan and I feel it was not a coincidence.

As stated in Universal Declaration on Human Rights, all people have a right to seek asylum when forced to leave their own countries. We need to have imagination that we ourselves, or our children may also need to resort to this right when we or they are forced to leave their own countries some decades later. In a course of history, the time has come for Syrian or Ukrainian people and that was why those students had to leave their home countries to come to ICU. Their presence,

however, has brought unexpected encounters and diversities to ICU community, and I firmly believe they will play some important roles in our society.